

国語

問題冊子

注意事項

試験開始の合図があるまで、この冊子を開けないこと。

- 1 この冊子の本文は10ページまでである。印刷の不明な箇所、ページの脱落などがあつた場合は申し出ること。
- 2 解答は、問題ごとに、答案用紙(別紙)の所定の欄に記入すること。
- 3 答案用紙は、その一、その二、の二枚である。それぞれに、受験番号と氏名を記入すること。

記入例

受験 番号	氏名
1	大塚 茶織
2	
3	
4	
5	

- 4 答案用紙の解答欄上部の点線枠内には何も記入しないこと。
- 5 この問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ること。

次の文章を読んで、問(一)～(七)に答えよ。

妊娠中の姿を撮影する「マタニティフォト」が近年注目を集めている。それが「はじめての家族写真」とされるのは、写真に写る腹部の膨らみが胎児を代理的に表象するからであるが、昨今では超音波写真がより直接的でリアルな胎児のイメージとして、マタニティフォトの被写体に加えられることも多い。そこには、超音波写真がいかなるメディアとして機能しているのか、また胎児がいかなる存在として位置づけられているのか、ということが示唆されている。

超音波写真には二つの透明化のプロセスが介在している。一つには、胎児の前景化に対する母体(あるいは、母体の前景化)に対する女性の身体(の後景化)の透明化、もう一つには、部分的な身体の前景化に対する全体的な身体の後景化(透明化)である。これらは写真の被写体のレベルにおける透明化の問題であるが、写真というメディア自体の透明性(<sup>A</sup>)に着目してみることもできる。多くの写真論者が指摘しているように、写真を見るという行為は、写真という媒体そのものを後景化(不可視化)させ、そこに写された被写体と対峙(じ)する、ということである。だからこそ、写真はつねに誰かの／何かの写真であることから逃れることはできない。

写真があるがままの現実を写しとるメディアらしいということは、ごく一般的な感覚として私たちに了解されている。ロラン・バルトが「それは、「か、つて、」「あ、つ、た、」という言葉で示したとおり、写真はそこに写っている被写体がその瞬間にたしかにそこに存在していたことを物語っている。そのような現実性・客観性を写真に見出すとき、私たちの意識は写真という媒体そのものではなく、それが写しだす被写体をとらえている。写真のもっとも基本的な特性はその透明性(に)あるとされる。写真が容易に加工可能なものとなった現代においても、人びとは写真の透明性に対する信頼を完全に捨て去ったわけではない。

写真の透明性は科学(と)シンワ的(な)関係にある。見えないものを可視化させるという科学写真の試みはすでに写真の創成期から存在していたが、その可視化に写真という装置(が)チヨウホウ(されて)きたのは、写真が透明なメディアだと位置づけられているからにはかならない。

「骸骨を透かして見せるX線写真のイメージは、否応なく死を連想させるものでもあった」(浜野志保)と指摘されるように、X線写真が死のイメージと結びつけられていたことは興味深い。この指摘は被写体がどうみえるかという次元にかかわる問題であるが、そもそも写真というメディア自体に死のイメージが埋め込まれていると考えることもできる。それは写真がホウセツする「かつて、あつた」という過去性を帯びた被写体の姿が、写真を鑑賞する時点においてはすでに失われたものとなっているからである。それに対して超音波写真では、死の暗示というよりはむしろ生の証明としての側面が強調される。それは、一つには被写体である胎児が生のイメージと強く結びつけられていること、もう一つには超音波写真が超音波検査におけるリアルタイム映像を切りとった写真であり、写真が撮影される瞬間とその写真を鑑賞する瞬間が極度に接近していることに起因している。

このような写真と特定のイメージとの結びつきは、写真が被写体の実在に対しては透明であっても、その意味はさまざま言説やイメージによって解釈されうるということ、すなわち写真が「疑似的な世界を演出したり偽装したりする、いわば「不透明なメディア」にもなりうる」(松本健太郎)ということを示している。

近年、超音波写真のプリントサービスやエコーアルバムの販売は主要なマタニティ産業の一つとなっている。それらの登場によって、医療の場で胎児の(女性の)身体を管理する手段として用いられてきた超音波写真はその位置づけを大きく変化させつつある。それは「記録としての医学写真」から「記憶としての家族写真」への変容ともいえる。家族写真としての超音波写真は、胎児期の成長過程をたどるだけでなく、その後一生をかけて集積されていく家族アルバムの最初一枚として位置づけられる。

ある写真を家族アルバムに収斂れんすることにはどのような意味があるのだろうか。それは写真によって断片化された出来事の時系列に並べ替え、「家族」というテーマを軸にして一つのストーリーをつくりだすこと、すなわち記憶を再構成することにはかならない。家族写真としての超音波写真は、母親にとつての過去の記憶を再構成するばかりでなく、子ども自身にとつても実際には覚えていない記憶を代理する役割を担いうる。医学写真としての超音波写真は「予見医療」という未来へのベクトルを

もつものであると理解できたが、家族写真としての超音波写真は「思い出」という過去へのベクトルをもつ。ピエール・ブルデューは家族アルバムを統合の指標として以下のように位置づけている。

家族アルバムは社会的想い出の事実を表現する。家族写真の説明つき紹介、すなわち新しい家族のメンバーに課せられる一体化の儀式ほど、失われた時間の自閉症的探究に似たものはない。年代記的秩序、すなわち社会的記憶の「理性的秩序」に従って分類された過去の写真画像は、保存されるに値する出来事の想い出を喚起し、伝達する。というのもも集団は、過ぎ去った統一の記念碑の内に、統一作用の一要素をみるからであり、あるいは同じことだが、現在の統一の確認をその過去から受け継ぐからである。(ピエール・ブルデュー)

これに加えて<sup>(d)</sup>カンカすることができないのは、超音波写真の保存をめぐって、使用されている感熱紙の扱い方がしばしば話題にのぼるとのことである。感熱紙は色褪<sup>あ</sup>せが激しく長期保存に適さないため、それをカバーするためにいかなる方法をとるべきか、ということが問題化されているのである。たとえば多くのエコーアルバムには超音波写真の劣化を防ぐ保護シールが付属されているし、超音波写真をほかのメディアに書き換える(スキャンしてデータ化したり、フォトブックの作成を依頼したり、スマートフォンのアプリで撮影したりする)といった方法も一般的なものとなっている。超音波検査の段階において「リアルタイム映像の写真」であった超音波写真は、さらに「写真の写真」のような重層的な状況へ変換される。そこではそれまで透明化されていたはずの写真の媒体的特性が過度に強調され、胎児の写真を収集・保存するということが写真に写る胎児に先立って前景化されることになる。

家族アルバムを構成する写真に写された人びとの身体のなかでも、顔というパーツは特別な地位が与えられている。昨今登場した「スマートセレクト」や「スマートキャストリング」のような機能をみると、「どういう顔の写真が写っているか」が重要な問題と考えられているように思われる。それは胎児についても例外ではなく、カップルの顔を合成する機能を用いて、将来的

に生まれてくる可能性のある赤ちゃんの顔を予測するスマートフォンアプリなどは、「写真における顔の重視」と「胎児の身体における顔の重視」の両方をよく表している。

家族アルバムへの超音波写真の再配置は、超音波検査の段階において分断された身体のデータでしかなかった胎児を一つの顔として位置づける。雑誌やツイッターに投稿された超音波写真には「いまとそっくり」「イケメン」といったコメントが付されているし、家族写真の一端に並べられた超音波写真を眺めるときにはしばしば現在の顔との類似性が注目される。そこでの超音波写真は特定の人物と同一可能な肖像写真とみなされる。しかしその一方で、超音波写真をパスポートやマイナンバーカードなどの証明写真に使用することはできない。その理由は超音波写真が不鮮明だからというだけではない。胎児の顔の個性が無効化されていたり、胎児の顔と新生児の顔(誕生以前/以後)のあいだの連続性・同一性が無効化されているのである。この両義性が示すとおり、胎児はそれを取り囲む言説や文脈によって顔をもつものにも、<sup>3)</sup>またないものにもなりうるのである。

認識や分類の恣意性によって、超音波写真における胎児は標準化(普遍化)と個別化のあいだを往還する。超音波検査の段階において医学的基準による標準化のなかに置かれていた胎児は、家族アルバムに再配置されることによって私的で個別的な存在とされる。ただし近年、家族アルバムのなかの超音波写真はインターネットやソーシャルメディアを通じて、家庭という閉じた空間からいつでも流出する可能性をもっている。たとえば「filter」では「#エコー写真」のようなハッシュタグによって、複数枚の他人の超音波写真がタイムライン上に表示される。それは超音波写真を再配置する新たなフレームとして、また、胎児のイメージを形成する新たな参照項として機能しうるだろう。

超音波写真による胎児の可視化をめぐる問題は、そもそも身体それ自体がさまざまテクノロジーの介入や恣意的な認識枠組みによって眼前に浮かび上がってくるものであるということ、あるいは「見る」という行為が存在の根拠になりうる(存在しているものを可視化するというよりも、見ることによって存在させる)ということを示唆している。医学写真としての／家族写真としての超音波写真も、「医療における記録化」と「家族における記憶化」という一見すると異なる様相を(e)テイしながら、写

真を通じて胎児を身体化させるという意味では共通している。

だとすれば、超音波写真が家族写真としての位置づけを担うようになったからといって、胎児の身体が対象化・断片化から取り戻されたわけではないことは明らかである。むしろ<sup>(4)</sup>医学写真としての超音波写真と家族写真としてのそれは共謀可能な関係にある。「映像の分かりやすさがきわめて好都合なのは、大衆がそのような新しい技術に親しみを抱き、自らも進んでそれに従おうとする点にある」(アンリ・ムーラン)のは確かだとして、その自発性の根拠はもはや出産をめぐる医療技術という範疇にのみ求められるものではない。家族という単位への自発的統制を組み込みながら、超音波写真はゆるやかに胎児の身体を管理・統制する装置となりうる。

(塙幸枝「超音波写真と胎児のイメージ——記録としての医学写真から記憶としての家族写真へ」による)

注 ○ロラン・バルト——Roland Barthes (一九一五—一九八〇)。フランスの批評家。

○ピエール・ブルデュ——Pierre Bourdieu (一九三〇—二〇〇二)。フランスの社会学者。

○「スマートセレクト」や「スマートキャスティング」のような機能——写真に写っている顔が「笑顔か」、「誰の顔か」といったことを判断し、自動的にアルバムを作成してくれる機能。

問(一) 傍線(A)「透明性」と傍線(B)「透明性」の違いを説明せよ。

問(二) なぜ写真が傍線(1)「不透明なメディア」になりうるのか説明せよ。

問(三) 家族アルバムが傍線(2)「統合の指標」になるのはなぜか説明せよ。

問(四) 傍線(3)「顔をもつものにも、もたないものにもなりうる」とあるが、それはなぜか説明せよ。

問(五) 傍線(4)「医学写真としての超音波写真と家族写真としてのそれは共謀可能な関係にある」とあるが、この「共謀可能な関係」とは何か、わかりやすく説明せよ。

問(六) 波線「身体それぞれ自体がさまざまなテクノロジーの介入や恣意的な認識枠組みによって眼前に浮かび上がってくる」とあるが、どういうことか。これに関する具体例を挙げて説明せよ。字数は三〇〇字程度とする。

問(七) 本文中の傍線(a)～(e)の片仮名を漢字に直せ。

次の文章は舟旅の様子を描いたものである。これを読んで、問(一)～(五)に答えよ。

「今宵の泊まりは、かの見ゆる磯山の陰にや」など言ふも、いつしかと心もとなきに、日さへ暮れぬれば、いとど心細し。舟人の習ひとして、夜舟漕ぐには、知るも知らぬも呼び交はしつづ、遠近かたみに力添ふめる、あはれなり。風やや吹きしきりて、波高く立ち来るに、そこはかとなく漂ふ心地す。舟人の、「雨気なり」と言ふに、<sup>(2)</sup>「今しばしの程を。いかならむ」と、心のみ碎かるるも、楫の力には及ばねば、「よし、さはれ」とて、屋形の内に頭差し入れて、うち臥しをり。

夜中ばかりにやあらむ、からうじて舟着きぬ。「御心休め給へ」と言ふもいと嬉しきに、「ここもとにこそは」とて、碇落とし入れたる音の、枕上に響きたるこそ、またなく嬉しけれ。されどなほ舟のいみじうたゆたふは、余波高くこそと思ふに、心地も悪しけれど、「かばかりは」とて、人々も寄り臥しぬ。舟人、「あな苦しや」とて、汗押し拭ひつづ、苦葺き渡し、粥うち啜りなどして、静まりぬ。

雨降り出でて、隙漏る雫もわびしきに、沖の方に、いと遠く細き声に、あまたたび呼ぶなるは、遅れし舟にや、と思ふに、<sup>(3)</sup>答ふる人もなければ、舟人をつき驚かすに、寝おびれたる声して、ただひとわたりうち答へたるは、いかでか聞き知らむと、おぼつかなきに、従者して呼ばするも、例に違ひたるあやしき声や思ふらむ。からうじて漕ぎ入れて、「危ふかりけり」と言ふいふ、この舟の傍に碇下ろすも、げにいかばかりにかと、くはしうも聞ひ聞かまほしきに、こなたの舟人、「さこそありけぬ。誰も同じかりけり」と、いとねぶたげに言ひて、やがていびきおどろおどろしうしたるも、<sup>(4)</sup>情なくこそ覚ゆれ。

(中島広足『檀園文集』「旅泊」による)



注

○舟人——ここでは船頭。

○雨気なり——雨になりそうな具合だ。

○よし、さはれ——えい、どうなっても仕方がない。

○屋形——舟の、屋根のある部分。

○かばかりは——この程度のことなら。

○苦葺き渡し——雨よけの苫を舟の上に掛け渡して。

問(一) 傍線(1)を現代語訳せよ。

問(二) 傍線(2)を、適切に言葉を補いながら現代語訳せよ。

問(三) 傍線(3)を現代語訳せよ。

問(四) 傍線(4)「情なくこそ覚ゆれ」とあるが、なぜこのように思ったのか、わかりやすく説明せよ。

問(五) 二重傍線(a)～(c)について、文法的に説明せよ。

(例)完了の助動詞「たり」の連体形

次の文章を読んで問(一)～(五)に答えよ。

美哉、<sup>(a)</sup>顔無父之御也。馬知後有輿而輕之、知上有<sup>(1)</sup>人而愛之。

馬親<sup>(2)</sup>其正而愛其事。如使<sup>(1)</sup>馬能言、彼将<sup>(1)</sup>必曰、「樂哉、今日之騶也。」<sup>(2)</sup>至於顔淪少衰矣。馬知後有輿而輕之、知上有<sup>(2)</sup>人而敬之。

馬親<sup>(2)</sup>其正而敬其事。如使<sup>(2)</sup>馬能言、彼将<sup>(2)</sup>必曰、「騶来、其人之使我也。」<sup>(b)</sup>至於顔夷而衰矣。馬知後有輿而重之、知上有<sup>(b)</sup>人而畏

之。馬親<sup>(3)</sup>其正而畏其事。如使<sup>(3)</sup>馬能言、彼将<sup>(3)</sup>必曰、「騶来、騶来、

女不<sup>(4)</sup>騶、彼将<sup>(4)</sup>殺女。」<sup>(4)</sup>故御馬有法矣、御民有道矣。法得則馬

和而歡、道得則民安而集。

(『韓詩外伝』による)

注 ○顔無父・顔淪・顔夷——御者の名前。 ○輿——車の人を載せる部分。 ○正——職務。 ○事——つとめ。

○衰——馬車を走らせる技術が劣る。 ○来——うながす語気を示す。 ○女——汝。

問(一) 傍線(a)「哉」、(b)「畏」の読みを書け。現代仮名遣いでよい。

問(二) 傍線(1)「如使馬能言」を訳せ。

問(三) 傍線(2)「少衰」とあるが、「顔無父」と「顔淪」の「御」はどのように異なるか、説明せよ。

問(四) 傍線(3)「女」、(4)「彼」はそれぞれ何を指しているか、文中の語を用いて答えよ。

問(五) 本文の筆者は為政者の理想の統治のありかたをどのように考えているか、本文全体をふまえて説明せよ。